

太宰治賞応募原稿

題名 『明日をどう生きる』
枚数 (原稿用紙107枚)
筆名 (寺沢憲重 てらさわのりしげ)
本名 (寺田憲治 てらだけんじ)
郵便番号 664-0856
住所 伊丹市梅の木 5-6-17
電話番号 072-784-3158
メールアドレス (teraken18@gmail.com)
年齢 (1946-11-17 71歳)
現職 自営業
略歴 羽咋工業高等学校・機械科卒、
トヨタディーラー、島屋建設、
食料品店、居酒屋、スナック、
ゴルフレッスン、囲碁将棋会所、
を経て現在の喫茶店に至る。

『明日をどう生きる』

寺沢憲重

今日まで生きて来て、座右の銘というか、自分のためになると思った格言があります。　「山よりでっかい猪ししは出ん」朝日放送のラジ才番組「おはようパーソナリティー」で中村鋭一さんがよく言っていた格言である。　人生には山あり谷あり、困難や試練が次々と起こります。自分ではどうしようもできないと諦めてしまったり、落ち込んだりもします。　この格言はそういう時に自分を奮い立たせ、頑張ろうという気持ちにさせてくれます。　目の前に起こったいかなる試練も、失敗を恐れず緊張せず、余裕を持って取り組めば、必ず解決できると気持ちが前向きになる――。　「山よりでっかい猪ししは出ん」この使い古した言葉は、私にとっては身近な言葉でした。　ほかにも好きな格言は「我が日々は良くな

りつつある」「創造は具現化する」「深く悩むには人生は短い」「愛は何を持ってしても変えがたい」――などがある。

この世には、教訓として、数々の格言や座右の銘はあるが、いずれにせよ、人生とは煩惱を日々乗り越えていくことであろう。

明日を生きる。これはごく当たり前で、死なない限りは、今日を生きて、明日を生きる。

明日がつく名言・格言を調べてみると……。「――明日のために今日を生きるのではない。今日を生きてこそ明日が来るのだ」

「――明日死ぬと生きて生きなさい、永遠に生きると思つて学びなさい」

「――だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である」

「――明日は今日より良くないかもしれない、悪いこともありうる。だが、明日にはひとつだけかけがえのない魅力がある。まだ来ていないということだ」

「――私たちには今日も明日も困難が待ち受けているが、それでも私には夢がある」
「――今日頑張ったご褒美に明日がやってくる」

どなたの名言かはあえて書きませんでした、このように列挙すると、明日というキーワードの名言には、枚挙にいとまがない。
「――樂觀主義は達成へと導く信念である。希望と自信なくして何も達成することなどできない」

このヘレン・ケラーの名言が大好きな私が考えたのは、理想的な人生は楽しみが待っている明日がずっと続くことではないか：：！
プロゴルファーが明日の決勝ラウンドを迎えるような、歌手が明日のステージを迎えるような、そんなワクワクする明日が理想だ！
惰性的ではなく、夢のある明日を向かえたい。
――そんな衝動的な思いから実現に向けて、新聞で募集していた某タレント事務所のオーディションに応募した――！

『オーデイション会場』

オーデイション当日は、慣れない電車に乗ってJR京橋駅の西出口から続く高架歩道橋を歩きビジネスパークへ向かった。

コースの途中に大阪城歩行者専用道周辺案内図があり、方向音痴の僕が、ツイン二十一MIDタワーの場所を迷う事なく、すんなりと目的地に向かって歩いた。

オーデイション会場に着くと、すでに受付は人でごった返していた。

若い青年部の男女が青いハッピを着て忙しく動き廻っていた。

会場の雰囲気になどなく飲まれてしまい、私は怖気付き帰りたいたい衝動に駆られた……。

本気で困ったなあ——腰が引けてしまう、状況判断のためしばらく様子を見る事にした。左の部屋では、お子様連れの父兄など百人以上がずらっと並んで様子を伺っている。

座るパイプ椅子が足らず、後ろの壁際の方

で立って見ている人達も大勢いた。

その最前列の前で数人の男女の子が、ジャズ体操かエアロビックスでやっているように、リズム音楽の音をがんがん響かせ、体を動かしダンスを踊っていた。

「ワンツースリーフォー、右ハイ、左ハイ、リズムに乗って、もっと元気に」

——先生の指導の声が飛んでいる。

「嫌だなあ、あんなことするの？どうしようカッコ悪う」

エライ所に来てしまったな……。

すぐに解った熟年組の私には、関係無くジュニアの部だけのパホームンスだった。

どうしたものか場違いな処に来てしまった。とりあえず自分の居場所を確保して、落ち着かなきゃとその場を離れ、受付の突き当たりの大きな窓際に立った。

窓の外を眺め、ふと眼下を見ると、20階からの素晴らしい眺望が広がっていた。

高層ビルが乱立する、都会の中に緑の木々

の大庭園があり、大阪城がすつくと見えた！
五月晴れの陽光をこんもりと繁った枝の若葉が光を浴び、春の風に揺れる姿は、まるで、木々が歌いながら喜んでるように見えた。
銅葺き屋根が青く錆び、天守閣には黄金色の虎や装飾が美しく輝いていた。

堀の水面も陽光を浴びキラキラ輝いていた。高くて離れた遙か上から眺める景観の素晴らしさにオーデイションの事もすっかり忘れて、暫し感嘆し：♪昔を語る天守閣♪：：と懐かしい三橋美智也さんの古城の唄が浮かんだ。

当時その天守閣から城下を見渡していた豊臣秀吉が、よもや城が見下ろされるようなことになるとは！夢にも思わなかっただろう。

当時の優秀かつ有能な学者だって、到底想像がつかなかったことだろう――。

「世の中がこうも変わろうとはなあ」なんて突拍子も無い、可笑しな思考をめぐらしつつ、高度成長を遂げ、凄まじいまでの進歩と発展を続けてきた時の流れと、今の時代に生き

ている自分とを重ね――見つめ直した。

ふと我に帰り自分のチツポケなさに何をう
だうだしているんだ。今更、優柔不断もいい
ところじゃないか、案ずるよりは産むがやすし、
「山よりでっかい獅子はでん」何事も経験だ
一丁トライしてみるか、俄然勇気が沸いてき
て「よっしゃ」と気合を入れ奮い立たせた。

オーディションは、審査する女性と机を挟
んで対面し、短いセリフを言ったり、早口言
葉を読まされたり、簡単な質応答をして一人
目は終わり、二人目は昔の映画俳優さんが面
接官で簡単な質疑応答で審査は終わった。

イメージしていたのは余りにも違いすぎ
て拍子抜けしたが――終わってホツとした。

――受付番号順に八人が一箇所に集められた。
某タレント事務所の社長が挨拶をしてから、
今日はどうでしたか？ 一人ずつ感想を右の
方から順に言っして下さい。――と言われた。

「初めての事なので緊張しました、先生に
色々言われていい経験をさせて貰いました」

「舞い上がって何が何だか分かりませんでしたし、た芸能人の方と話ができ、嬉しかったです」
世間で言うオバさん五人とオジさん三人である。社長は一人一人に笑顔で頷いていた。私の番が来た。みんなありきたりな感想やな、一丁ウケ狙いで笑わしたるか――、
「――今日は自信とはうらはらに恥をかいてしまいました」

社長は今まで以上に笑顔を振りまいた！
「一週間後に合格証書が届きます。合格された方は、タレントスクールで、又お会いしましょう。お疲れさまでした」

オーディションは終わり、気持ちがスッキリして何事も経験だこれでもいいのだと思った。オーディションを受けて一週間が過ぎた頃、某タレント事務所から大きな封書が届いた。中には合格証書と研究生心得及び規則を書いた書類と、合格者入所手続きのご案内、入所後の説明が書かれてあった。

レッスンスケジュール表、入所費用の手続

き、ちなみに二十万三千円を払わなければならぬ、レッスンの授業料は毎月払いで一万三千円である。

合格したとはいえ手放しでは喜ばなかった。むしろ批判的であり乗り気ではなかった。

やっぱり、お金儲けの手段か、そう簡単に誰でもタレントに仕立ててくれる訳がない、人の夢を食い物にしているのか、果たして芸能界への夢を叶うべく、その道の門戸を開いてくれているのか……？

行くべきか行かざるべきか、さんざん悩んだ挙句に——結論を出した。

授業を受けることは、今後何かに役に立つだろう。好奇心も手伝い違う世界を覗いてみようという気になった。

——かくして、平成九年五月十五日より、六カ月分の授業料を支払い、芸名「世森友」の身分証明書と「名札」を頂いて入所を済ませ、ゴールドシニアの十四期生とあいなったのである。

『某タレント事務所のスタジオA』

初めてのレッスンを受ける。

先生の名前は「月形哲之介」先生。

大昔に父親に連れられて、観に行った時代劇映画に出ていた名優「月形龍之介」の息子さんである。

「出席をとります」

点呼が終わり――。

「多いね」

三十人も参加していた。

私も驚いた……！

その内男性は私を含め三人だけだった。

それだけ一般的に女性の方が芸能界に憧れる軽薄な人が多いのか？それとも女性の方が暇だから、事務所に入所する確率が高いと見て合格者が多いのか、いずれにせよ、この人ならと、思わすような、際立って存在感のある人は見受けられなかった。

ようは――普通の人であれば誰でもオーデ

イシヨンに受かるシステムなのだ――。
 集めるだけ集めて、入所費用をふんだくつ
 てがっぼりと儲ける魂胆なのだ。

こんな所に居る自分自身がバカバカしくつ
 て、アホかと滑稽にさえ思えた――。

――だがさてよ？ レッスンを受けることは、
 今後、何かの役に立ち無駄にはならないだろ
 う。と思い直し、レッスンを受けることと決めた。

明日を楽しく、明日に期待が持てるように、
 今！何を学ぶべきか、今こそ、モチベーションが
 下がらないように、アグレッシブにポ
 ジティブに、頭・気持ち・心・行動の全てを
 やる気にさせ、この時間を努めていかなけれ
 ば、自身の裁量が磨かれないではないか……
 わくわくする明日を求め、非日常的な世界
 へ飛び込んだのではないか？と言い聞かせた。

『月形哲之介先生のレッスン』

「外郎売うしろうり

はみんな知っていると思いますぐ」

と言ったときに「はい」と知ってる人が半数以上居たようだが？ 私は知らなかった。

「ういろいろ売り」は劇団員あるいは俳優さん、アナウンサーなどめざす人には欠かせない教材である。要するに、この芸能の世界ではみんなが知っているカリキュラムなのだ。

――発声の訓練、調音の習得のためにあり、一語一語を淀みなく滑らかに言いこなせるように発音を練習するテキストである。

歌舞伎の演目の中の口上からの出典である。この口上が出来たいきさつを教えてくれた。

「二代目市川団十郎が喉を痛めて声が出なくなったときに、『いろいろ』と言う名の薬を飲んですつかりノドが良くなり、そのお礼に製造元の現地へ訪ねていった。

当時、役者稼業は階級が低く扱われていたにも関わらず、その店主から「ようこそお尋ね下さいました」と歓迎され、奥座敷に招かれ丁寧なおもてなしを受けたので敬服した。

帰途に着いた団十郎は、そのご恩返しにと、

長い宣伝文句を作った。その口上が今に伝わる歌舞伎十八番の一つ『外郎売』なんです」と解説してくれた。

現在も小田原へ行けば当時を偲ぶ佇まいが残っており、外郎を直売しているそうだ。

「それでは区切って読みます、後を付いて読んで下さい」

と、月形先生が声を発した！。

「――拙者親方と申すは」

――生徒みんなが――

「拙者親方と申すは」

とつづいて声を出す。

その直後に先生からダメだしが――。

「ええーと、これは往来で集まっている人達に向かつて喋っているセリフですからお腹から大声を出して下さい」

先生がやってみせる。

「――拙者親方と申すは」

流石凄い先生の声が教室に響き渡った。

年のことを云々言っていたが、昔取った杵柄

は錆びてはいなかった。

さすがもと役者である、響きのある大きなその声と台詞の言い回しに感動した。

抜粋すると、口上には、こんな早口言葉が、

——京の生鱈なまたら、奈良なま学鯉まなかっお。お茶立ちよ、茶立ちよ、ちやつと立ちよ茶立ちよ、青竹茶せんでお茶ちやと立ちや。菊、栗、きくくり、三菊栗、合わせて菊栗、六菊栗。

あの長押ながおしの長薙刀ながなたは誰たが長押の長薙刀ぞ。向こうの胡麻ごまがらは荏えんのごまがらか真まごまがらか、あれこそほん真胡麻まごま殻がら。——これはほんの一部です。

まったくもってスラスラ言えない。何度読んでも噛まずに言えないし、暗記も出来ない。千六百六十字の長いセリフである。

『次の週のスタジオレッスン』

岡田先生は外郎売のことに少し触れてお話しした後、「マア——」と大きく永く奇麗な声を出す練習を開始した。

両足を広げ腕を腰の後ろに組んで全員で――
「マー・・・」

一寸気恥ずかしい、一寸ばかばかしい、
先生がポイント説明をして――「マア――」
を発声する。

恥ずかしさと緊張しながらも一生懸命やる。
そして何度かマアを発声しているうちに、
恥ずかしさも消え少しづつ良くなってきた。

滑舌、鼻濁音、無声音化、呼吸法、抑揚、
高低強弱、日頃何気なく喋っている言葉や、
読んでいることに、こんなに正さなければ、
注意しなければいけない事があるとは……。

アナウンサーは大変だなぁ。何事も専門
的にマスターするのは並大抵ではないなあと、
思いながらも、感心と興味が沸いて来た。

そして、ある日のレッスンで、
その日のレッスンは、自分の考えたシーンの
動きを台詞なしで表現する演技指導だった。

一人一人が各自考えたシーンの演技をした。
先生がそれぞれのここをこうすれば、どこを

どうするか、もったこうやればと、批評と解説をする。良かったところをほめることはほとんどなく、厳しいダメ出しが多かった。

「日常の再現ですから、電話の場合知らせる相手の言葉を聞く間が大切です」

「——うん」

「物の形が無くても、演じる本人が感じて、無いものがあるが如く演じることです」

「その演技を無対象行動と云います」

「状況だけ表現できてもダメです、その後の喜びも表現することが大切です」

「うんうん」

うなずきながら先生の教えを聞いていると。

私の演技のダメだしと解説が始まった。

「ナイスショット、ピンに寄った。あの時にもっと嬉しさを出して欲しかった」

嬉しさの開放表現をもっと強調するようにと演技指導を受けた。

あれは次の、バーディーパットに、気持ちを切り替え集中して、内に秘めた闘志を表現

していた積りだったのにと、内心では……。
「今度同じことをやったら、もっと上手くやれるでしょう。進歩していると思います。中にはそこそこ出来ていた人がいます。」

私の事かなと思って結構です。今度はこうしようとか、色々反省しているでしょう。

一度聞いた間違い、注意されたことは忘れないで守ってください。

時間が来たので、以上で本日は終わりです」
「どんだん自分が変わっていくように感じた。

恥ずかしいとか、緊張でどきどきするとか、馬鹿馬鹿しいとか嫌だとか、演じる時に顔が引きつる、手足が小刻みに震えることなど無くなり、人前でも恥ずかしがらなくなった。むしろ、人前で何かをすることが楽しみに変わり積極性が出てきた。来週のレッスンを待ちどうしくさえ思えるようになった。

『初めてのコマーション撮影』

大正駅から京セラドームへ歩いて到着！。

ディレクターか監督か知らんがメガホンを使って、「皆さんは野球を観戦している観客です。打者がバッターボックスにいます」

と言われて、みんないつせいに、打者が居もしない――ホームベースの方を見る。

「カーン打ったボールが伸びる伸びるホームラン。私の合図で応援してみてください」

「5・4・3・2・1・打った」

エキストラが一斉に歓声を上げ、手を振り、手を叩く、野球観戦をしているかの様に撮影する模擬的なニセの行動は、虚実的やらせの映像を作成する事であり、大勢の演者が想像して観戦者に成りきってその雰囲気演技すること、野球を観ているシーンが撮れる。あたかも観戦しているかのように見せるんだ。今、その捏造の現場に居るんだ――と、愚もない屁理屈が頭の中を過ってしまい、すぐに気分は乗ってこない――。

もつと大声を出して、

「入れー入ったー、ホームラン！ やったーや

「つたー」と、何度もリハーサルは行われた。
「みんなが揃って一緒に手を上げてたら変で
しよ」と怒りのダメダシで、またやり直した。
「盛り上がり短い」「同じことばかり一緒
に言わない」

演出担当がイライラして怒り出した。

「ベースランニングをしている選手を目で追
いながら応援するように」

と厳しい指導をして大声で怒鳴っている。
馬鹿馬鹿しくて、気乗りがしなかった私も、
リハーサルの繰り返しで、皆の声も演技も、
ヤル気満々で、どんどん迫真を帯びてきた。

ディレクターもスタッフも乗って来た。
集団心理が働きそこには個人の人格も思惑も
消え、一緒になってやることに心と体は洗脳
されたように一心不乱、どこか脳裏に有った
冷めたものは消え、集中力が他の思考を忘れ
させ無我夢中の世界。

大袈裟にも役者がその役にハマりきってし
まうこととは、こういうことなのかと思った。

そして、青いシートで客席の前を覆っている席へ移動させられた。

私達からは青いシートの裏側の球場のセンターから半分は見えない、グラウンドのライトスタンド方向の半分が見えるだけである。要するに、青いテントを見て球場をイメージしなればならないのである。

そのスタンドに先ほどの設定のまま、全員が横に移動させられ、スタッフの声が飛ぶ！

「大きな荷物はそこに置いて下さい」

言われた位置に移動しスタンバイOKだ。一度だけリハ―サルをして、本番開始だ！

「ハイ本番」 「本番」 大きな声がかかる。

撮影が開始された、カチンコ無し、5・4・3・2・1・スタートの合図で、みんな張り切って観戦者に成りきって演じている。

「入れろ」 「ヤッター」 「ホームランやろ」 本番撮影が終わりモニターでチェックする。

しばらくして「オーケーでえーす」の声、「ヤッター」一発で決まりみんなが喜んだ。

「やったー」満足感を味わい各人が声を掛け合う「お疲れさま」「お疲れさまでした」スタツフからも「お疲れさまあー」この言葉がこれ程清々しくて、解放感があったとは、実に久しいことで——心地良い気分になった。

『ある日のレッスン風景』

荒井先生は「暴れん坊将軍」の監督である。お顔立ちは怖い、現場ではかなり厳しそうだ。だけど私達シニアに対するレッスンはやさしくてユーモアがあって面白いんです。

演技指導の時なんか、乗ってくる生徒の間違った演技を真似てオーバーアクションでダメだし、お腹がよじれるぐらいに皆大笑い。立ち読み稽古のときなどは、なまるとすぐにその人のイントネーションを真似る。

「大阪弁や」「あんた、九州か」「あんた東北か」「四国か」とつつこむ、全員が訛るからつつこまれる。それがメチクチャ面白い。「砂丘」という青春映画の台本の演技指導。

監督がメガホンを取った大昔の映画である。

悠子と信吉のラブストーリー、信吉が砂浜で絵を描いている。そこへ、悠子がそつと近づき、後ろから「コンニチハ」と声をかける。

信吉が振り向き「やあー」と応える。

台詞のやり取りがあつて、最後のシーン：、信吉（悠子を背後より抱きしめ）

「悠子、好きなんだ！好きなんだ！」

悠子（信吉をふりほどこうとしながら）

「嘘よ、お姉ちゃんにも、わたしと同じこと云ってるんでしょ」

信吉「違う！ぼくが好きなのは最初から悠子君だった」

（信吉に抱かれたまま泣いている悠子、いつの間にか陽は落ち、二人の足元に波が打ち寄せている） 終わり

これを演じるのだが、非常に難しいのだ。

「照れて感じが出ない」台詞を大きな声で云えばいいってもんじゃない、笑っちゃうよ、

二十代の頃を思い出して演じろって、今更

無理だよ無理、このシーンが最高の山場なんだからと云ったって、年食ってるオジさんオバさんなんだから、真剣になってやればやるほど、やる方も見るほうも、滑稽すぎて……。

悠子役のオバさんが信吉役のオジさんに背後から近づいていく演技を見て……。

「抜き足差し足忍び足、おまえ泥棒か」

とツツコミを入れ、監督はオバちゃんの天然ボケの演技に呆れて笑いを堪えきれない。

青春映画のワンシーンの稽古風景は、どんなバライテイー番組よりも、めっちゃ面白くてお腹を抱えて笑っちゃうよ——ほんま」

『初めてのNHKの撮影体験』

「もしもし世森さんですか！」

某タレント事務所から携帯に掛かって来た。テレビドラマ『生前の予約』の一シーンに医者役で出る話が来た。

「谷町線で谷町4町目に降りて、2番出口を出て右へ、5分ぐらい歩けばNHKです。」

二十六日十一時三十分迄にメイク室前に行つて下さい」

「前日午後五時に確認の電話を下さい」

「はい、了解しました」

全国に映る！ その他大勢ではないんだ。

「ヤッター」何やワクワクしてきた。

その話が来てから私は医者役ってどんな演技をするのか気になってしょうがない。

患者を診ている医者をイメージしていた。

当日、遅れてはいけないと早く着き過ぎた。

玄関に入って右の受付で来訪目的を告げる。

「某タレント事務所の世森友です。生前の予約の出演で来ました」

確認した後、メイク室を教えてください。

余談だが聞くとところによると、NHK放送局はわざと迷路のように作ってあるらしい。

一階と二階、一階と地下、二階から地下へ、各階が複雑に錯覚するようになってるのはテロ対策なんだって、確かにビル全体が継ぎ足して作ったような構造になっている。

メイク室前のソファで待つこと約一時間、途中から看護婦役の短大生と一緒にだった。

「お早うございます」

誰が誰なのか全く判らないが挨拶はする。芸能人も通る。俳優の小林薫は姿勢が良くてテレビで見るとより体もがっちりしていた。

私の事務所のマネージャーがやって来た。

「お早う御座います何か指示有りました？」

「まだ何も聞いてませんが」

ようやく、ADらしき若い人が出てきた。

「医者役と看護婦役ですね、二人衣装室で着替えてから此処で待っていて下さい」

白衣と小道具に聴診器、「岡」と書いた名札の衣装係のニイちゃんは、エラそうにつっけんどな物の言い方をする。

年上が丁寧語で気を使い喋っているのに、「クソッ」

腹がたつ、貸しロッカーを教えてもらおう。普通の半分の大きさの古いロッカーである。

白衣に着替え手荷物を入れ、ソファに戻る。

看護婦役の後藤さんと話をしたり、時々、化粧室にあるモニター画面を見たりしていた。

その画面には、現在、撮影している「甘辛しやん」のモニターが映っていた。

長い間、嫌になるほど待たされて、やっと、さきほどのADの人が来てくれた。

「撮影は午後なので、お昼を済ませて来て」
なんちゆうこっちゃ、馬鹿にするな――、
散々人を待たせておいて、でもグツと我慢：

「済ませたら、一時には戻って来て下さい」

「――はい、はい」

食堂は地下か二階か三階なのか判らないが、うろうろしているうちにどうにか着いた。

その日のおすすめメニューの食券を買って、中に入っていくとセルフである。どうやっていいのか？チョツと戸惑ったが前の人のやり方を見習い、なんとかお盆に食べ物は揃った。

空いているテーブルが見つからない、ほとんどが相席状態で、間もなく食事が終わりそうなる人のテーブルが空くの待った。

後藤さんはうどんを持ってやってきた。細かい話だが、うどん代は私がおごってあげた。お父さんぶって安いもんだとばかりに、ええ格好したのである。

二時近くになって、やっと、ロケ現場の大病院の裏手で撮影の準備が始まった。

後藤さんの髪をメイクさんが直している。

私は日陰でスタンバイしていた。

「医者役の人、こっちへ来て下さい」

カメラ前の演出家らしき人に呼ばれた。

「あの入口から出てそのままこちらに真っ直ぐ歩いてみて下さい」

「はい」

なんや歩くだけかいと思いつつも昼間の散歩の雰囲気を出して歩いた。

カメラマンと何やら打合せをしている。

そのカットをどうするか決まったようだ。

「すみません、ここまで来て下さい」

カメラの直ぐ前に後ろ向きに立たされた。

「肩をぽんと叩いたら歩き出して下さい」

スタートの位置と少し斜めに歩く方向、そして、昼休みに外に出てぶらっと歩いている感じを出すようにと指示が決まった。

そして俳優の小林薫も現場に現れた。私と、すれ違うカットを撮る事が判った。

小林薫は、紺のスーツを着て、右手にカバンを持って急いでいる様子で走ってくる。

私がゆっくりと五、六歩、歩いた所ですれ違う、そんな設定でリハ―サルが開始された。

二度のリハ―サル、細かい指示があつて、「はい、本番」「OK」が一回で出た。

歩くとき小林薫に目を合わさずに、白衣のポケットに手を突っ込みゆっくりと歩いた。

次のカットは、小林薫が走って下りて行く、スロープの途中で看護婦役の後藤さんとすれ違う場面の撮影だ。これもちよつと歩いて、

「――ハイOK」

これで終わりだろうと思っていたら、もうワンカットあることが告げられた。

今度はどんな場面だろうと期待して待った。

現場は急に慌ただしくなった。移動カメラのレールが組まれていく、ガタつかずにカメラがスムーズに移動できるように、大工さんがよく使う道具で水平を計り、厚さの違う板を下に噛まして行く、照明さんもレフ板の位置やライトの位置をセットしていく、その間、私達二人は炎天下に立ったままであった。主役なのかは知らないが、小林薫さんは、折りたたみ式のチェアに悠然と腰かけている。私は、たばこ一本も吸えない炎天下の野外で我慢しなければいけなかった。

ようやく準備が整いリハーサルに入った。私は、小林薫が走り抜ける後から、五、六歩歩いて病院内に入っていくだけである。

スタートの合図で、小林薫が走り出す。私は、その後を車の横から出て歩き出す。通路は、日陰と日向がはっきりとしていた。一回目のダメダシ、小林薫と後藤さんに、「走るところを少し病院寄りにして下さい、彼女は立つ位置とすれ違うときに、もう少し

近くで、あまり離れないようにして下さい」

「4・3・2・1・スタート」 「カット」

三人でモニターを食い入るように見ている。

「はいOKです」

少しでも顔が写るように、顔を少しカメラに向け、小林薫が走り抜け病院の角を曲がるまでは、カメラが回っている筈だから、その間ゆっくりと歩いてはみたが、はたしてどう写っている事やら、見ていないから判らない。私は後ろ姿と横、彼女は前から後ろ姿だ。一段落して飲み物が支給された。

ロケスタッフ全員で休憩、ちよつと休んで、次のシーンの撮影が始まった。

私は立ち疲れ病院の壁に寄りかかっていた。帰っていい筈なのに、次のシーンの段取りで必死に働くスタッフはてんでこ舞、こっちは放ったらかしで、何にも気にも止めてくれない、相手にもされずに、撮影現場の様子を見ながら、待っているしかなかった。

救急車が到着し担架を降ろし、病院の廊下

を急いで押していくシーンの撮影が始まった。設定が決まり演出も決まった。

リーサルをして動きをチェックして本番だ。リーサル前も本番前もスタンバイ中の小林薫は、このシーンから共演する俳優さんと、ふざけ合いリラックスして雑談をしていた。演技に集中している様には見えなかった。

「現場慣れしてる人は違うな———」と思った。「本番」で顔つきがころっと変わり真剣になり、その場の雰囲気を出し上手に演じていた。スタッフも全員が、病院内に入ってしまった、外には二人だけが残され誰も居なくなつた。ふと、ディレクターズチェアが目についた。ぽつんと残っているディレクターズチェア、先ほどまで小林薫が腰掛けていたチェアだ。座ってみたい衝動に駆られ、我慢し切れずにディレクターズチェアに腰かけてしまった。座るや否や間髪を入れずに後藤の怒鳴る声、「ダメ———」

——慌てて立った私は自分を恥じた。

やってしまったことを黙って反省した。
撮影が終わり私達にやっと気付いてくれた。

「お疲れさまでした」——やっと終わった。

早く云ってくればいいのに、阪大病院からNHKまで歩いて帰るように云われた。

近いとはいえ初めて来た所から、NHKまで帰るので、方向が判らなくなっていたから、

病院の受付嬢にNHKまでのアクセスを聞いたら、分かりやすく親切に教えてくれた。

大きな歩道橋を渡り終え横断歩道の信号待ちをしているときに、後藤さんが切り出した。

「さつき、小林さんの椅子に座ったでしょ、駄目ですよあんなことをしたら、こんな事をした人がいると事務所にクレームが入って、仕事が回らなくなったらどうするんですか」

「うう——御免ねえ、五十を過ぎたら腰がね、長時間立っているのが辛くてなあついつい」

私は気まずくて仕方がない平謝りのをした。謝ったのに——まだ追い打ちだ——。

「私たちはこの業界でまだ下っぱだから、上下

関係が厳しい世界なのに、一寸でも嫌われる事をしたら上にいかれへんよ」

しつかりしてる。そこまで年上捕まえて説教するか、お前は何様や：何様のつもりだア。

お前は無理や、何のぼせあがつとんや、俺と何ら変らん立場やないか、一緒にエキストラやった仲やないか、俳優の卵か何や知らんけど、年上にそこまで説教するか、年上に対する思いやりとか配慮、遠慮は無いんか生意気やぞ、このブスが芸能人に成れる顔かボケ、頭に来てそう云いそうになったが、それをグツと堪え胸にしまい、冷静を装って：：、

「――悪いことした――ホンマにスマン」

相手の言い分は的を射てるし、私がいけないんだから――だが、我が子より年下の短大生に対し素直に成れず。今後気をつけます。二度と迷惑は掛けませんとは云えなかった。

「なんでこんな子にうどんをおごったんや」

ムカつく気持ちのまま、メイク室に戻って、貸しロッカー前でさっさと着替えをした。

ロッカーに向って立っている背中の後ろが、控室の入り口になっている、人の気配を感じはつと振り向くと、小林薫さんが上がり框に腰かけて本を読んでいた。あれっもう帰ったのか早いな、車で送って貰ったのだろう。帰りの身仕度を済ませ、帰り際に振り向き、本を読んでいる小林薫さんに向かって――。「お疲れさまでした」

小林薫さんの顔を見てちゃんと挨拶をした。だが、目が合ったのに、あんた誰って表情で素っ気無く無視して頭も下げなかった。

撮影現場で私を見ていなかったにしても、目の前で白衣を着替えていたのだから、一緒にロケをしたエキストラかなぐらいは察しがつくだろう。誰だか判らないにしても、この近さで「お疲れ様でした」と挨拶されて、軽い会釈も返さないとは、お前はそんなに偉いのか、有名人はエキストラ如きに、いちいち挨拶してられないのかチョツとがっかりした。好きな俳優さんだったが一遍で嫌いになった。

小娘にこっぴどく叱られたことを思い出し、一層気分が悪かった。しかし、帰りの電車の中では妙な満足感が嫌なことを忘れさせた。

『スタジオ待合所』

いつも早く着いてエレベーターの踊り場にある、長い腰掛けのある喫煙場所で一服する、「お早うさん」「お早う御座います」

お決まりの挨拶を交わす。

レッスンに合わせてぞくぞくと生徒が集まる。顔見知りになり、こんな会話を交わす

「世森^{せもり}さん、最近、何か出た」

「この間テレビに写ってたね」

「あの人、テレビに出てたのを見たよ」

こんな仕事をした。あれに出た。こんなエキストラの仕事をした。などなど、わいわいガヤガヤと、出演した撮影秘話が飛び交う。

「CMのオーディションを受けた」

「あの人この間テレビに出とったね」

「わたし今度これに出てるから見てね」

「女優さんの横で、飲むシーンを撮影して、それを見たらアップで三秒ほど写った」などなど、そんな自慢話でもちきりだ。

「もう何か出た」「別に」「仕事来たんでしよう」「うん、エキストラや」「何出たん」

「そんな、言うほどのことやってへん」

「仕事があるだけいいやないの」「まあな」「その他大勢の仕事は断っているの」

と云う人もいる。私もそう思っているけど、今は経験を積む事や、なるべく、事務所から与えられた仕事は断らないように頑張ろう。

エキストラでも何でも我慢して受けよう。

趣味だと思つて気楽に続けることにしよう。運が向いてくればおいしい仕事が来るだろう。みんなも勘違いしないように心得なさいよ。

芸能人やタレントはあり余っている、駆け出しの素人がそう簡単にいくか、夢を持って夢に向かつて生きるのは良い事だが、夢だけにしとけよ——とつくづく思うのである…。

某タレント事務所は、エキストラ派遣のピ

ンはねで儲けている実態は紛れもないのだ。
日々の行いは、惰性的で同じことの繰り返
しかも知れないが、明日は新しい一日であり、
新しい体験の始まりだ、同じ一日ではない、
雑事も居食住も、確実に昨日とは違う、身
体も年も一日違う、当たり前前のことであるが、
そのことを明日になって一歩進むと思うか、
後退すると思うか、明日を安閑と待つので
はなく、何でもいいから、心と体と頭で思い
つくまま何かをする。見る。出会う。聞く。
何か行動する。自分にとって、励みになる何
かを見つける。そしてそれをやり続ける。
楽しみや感動が待っている明日にしよう！
それが！テーマの明日をどう生きるなのだ。

『ある日のレッスン風景』

あるドラマの台本の一部で立ち読みの稽古。
「あっ、なんだろうあれ？ほらあそこだよ、
あそこ、見えないの、あそこに赤い屋根があ
るでしょう。もっと右もつとずつと向こう。

赤い屋根のずっと上の方だ。何かキラキラ光って、ゆっくり東の方へ動いているだろう。見えないの？ほらだんだんあっちへ飛んでくじやないか。ああ、あの屋根のかげに入っちゃった。見えたらう！丸くてキラキラ光ってたぜ、あれはUFOかもしれないぞ、そうだ！UFOだよ——ここまでが台本です。これを劇場の舞台の上で、上手な演技で、大勢の人前でリアルに再現できるかな：：？この状況を想像してその場に居ると思っ想像を働かせてセリフを云っているんだが、先生に何度もダメだしをくらって、言い直しをさせられ、気分が悪くなりそうになった。まず「ほら」でダメダシ、近くの物を指して云う「ほら」と遠くを指して云う「ほら」と驚いて云っている「ほら」何かを見せるとき「ほら」側に聞いている人が一人のときと大勢いる場合の「ほら」状況によって全て違うでしょ。この台詞の中の「ほら」はかなり遠くの物体を見つけて驚き、側に居る彼女

か友達に教えたい「ほら」を表現しなくてはいけない。――と指導をしてくれる。

次に「ああ」であるが。早く見つけて欲しい気持ちと、残念そうにスーッと消えていく様子と見えなくなるスピード感と、動きが伝わるよう、その気持ちと状況を表す「ああ」なのだから、短かいのも間延びしたような「ああ」も駄目。諦めたときや驚きとも違う「ああ」なのだ。決して悶えている訳ではない――とセリフの指導をしてくれた。

女性のセリフが、悩ましい「ああ」に聞こえたり、間が抜けた感じに聞こえたりで、各人各様の天然ボケで笑いが起こり、先生も色々ツツコミを入れ、ジョークを飛ばし笑わしてくるから「スタジレッスンは面白い」他の人が立ち稽古をしている間に、自分ならこうしようとイメージは出来ているのだが、自分の番になると上手く出来なくて悔しい。「ダメダメ違う違う」先生が何度もチェックと指導、演出家だったら怒り出すだろうな。

レッスンは真剣な中に笑いがあった。楽しい。オバさん連中の天然の笑いにハマッテしまう。

『サスペンスドラマの撮影現場』

私と先輩と松倉さんと立ち話で時間を潰す。先輩も松倉さんも、それぞれエキストラの仕事をちよくちよくこなしているようだ。

「撮影が終わるまでの緊張感、OKが出てお疲れさまでした。開放されたときは、何とも言えない快感があるね」

「何かを成しえた時の達成感と似てるね」

「うん、それで病み付きになるんやな」

「日当安いのに」(笑)

「俺なんか毎回大赤字やで衣装代で」

「いつつも、ツアーパターン用意して、現場に行って下さいと言うけど一つでいけるで」

「今日かて、スーツを用意して来たけど」

「いらへん、いらへん」

「事務所は人材派遣センターやなあ」

「現場に人を送ってピンはねして儲けとる」

「やっとなんは」

タレント事務所のシステムについては、誰も不満を抱いているようだ。

本業を持っていないながらこんな事をしている。一年もすれば、半数以上は去って行く。

俳優業やタレントに成りたい夢を無残にも打ち砕かれ辞めていく人がほとんどである。悔しい思いをしていることだろう。

人の夢を食い物にしてと言えなくも無いが、みんながタレントに成れる訳がないのだ。

私はその機会その時を楽しみながら、この非日常的な体験も人生勉強だと思っている。

いつでも辞められるんだから、ぼちぼちやっっていくつもりだ。ロケが押しているのか？

お昼の時間だ。スタッフが弁当を配り出した。

パチンコ屋の自転車置き場の周辺で座れる場所を見つけそこで弁当を広げた。

オジさん四人が横並びに座り昼ご飯を食う。

とてもじゃないが、こんな所で一人で過ごすとなると恥ずかしくて耐え切れないだろう。

四人一緒に過ごして居ると、人目をはばかることなく、人通りでも平気で食べられた。ロケは出演者のマネージャーがボヤクほど長引いた。夕暮れ間近の六時頃に終わった。「みなさんお疲れさま——無事日程終了。帰りの電車の中で、緊張した時間を思い出していた。エキストラの中から選ばれ、ちよい役をやらされ「鈴木京香」さんと共演したと、ほらを吹いて自慢したい気分になった。セリフは「知らんなあ」のたった一言だ。こんなことはあくまでも自分だけの価値観であり——自己満足に過ぎないのだ——。興味が無くミーハーでもない人にとっては、たわいなく滑稽なことに思えるだろう。「何やってんの暇やね」と言われそうだね、でも、こんな体験が出来た事が嬉しいのだ。

『ミナミの帝王の撮影現場』

黒い鳥の羽で出来たショールを首に巻、黒のブラジャーとハイレグの下着姿で、付けま

つ毛に厚化粧をしたオカマ役のウメちゃん、大柄だけに異様だ。ウメちゃんがアドリブで適当な振りつけで踊る。彼は踊り慣れたもので、身のこなしが様に成っている。

ストリップパーの様な挑発的な踊りだ。ダンサーの踊り方を即興で演じて見せている。ウメちゃんの踊る格好を見てディレクターが「それいいな、いいよ、それで行こう」

舞台中央の高い椅子に手をついて、後ろ向きになって、お尻を突き出し左右に腰をくねらせ、セクシイに踊って見せる。時折、衣装の下から白い下着がちらつく、何度も指で押し込んで隠す。ダンスの打合せが終了だ。ことの成り行きを舞台下手のサイドボックス席から私たちは見ていた。その場所に座る前に、一寸したいざこざがあった。

四人掛けの席の舞台寄りに岡本さん、右隣が私、私の前に、変なおっさん、その右側に栩野さんが座った。私から見て左手が舞台で、舞台の上手にカメラがある、私達がフレーム

に入ったとしても、ダンサー役のウメちゃん越しに、せいぜいが横顔が写るくらいだろう。

変なおっさんが席に着くや否や小言を言う。

変なおっさんが「俺、写らんやないか」

栩野さんが「どこ座っても一緒やん」

岡本さんが「カメラの位置あそこやで」

照明は眩しいばかりに照らしているが、確かに栩野さんがかぶって、変なおっさんは影になっっている。いじけて何か眩くおっさんに、

「かわろか？」と、私が言ったら、「ええ」

と変なおっさんは拗ねて、横の席に移った。

三人顔を見合わせて、含み笑いをしながら、

「変な奴、すねてしもたで」

「――まるで子供やな」

ウメちゃんが踊るシーンが取り終わった。

次のカットのリハーサルで、ニュー-halfの

「愛ちやん」の掛け声が途切れ途切れで、変な間が開いたために注意があった。

「途切れずに交互に声を掛けて下さい」

何度やっても、声援が尻すぼみになった。

これはマズイナと思つた矢先に雷が落ちた。
「やる気あんのかあしつかり声出さんかあい、
お金もろてるんやろう」——と怒鳴られた。
そこまで言うかと思ひながらも仕方がない、
リハーサル二度目、その時スタッフも模範を
示すように一緒に、「アイチャーン」と、大
声で叫んでいた。「今の調子で」頼むでえ、
そして本番、半分やけになつて頑張つた。
3カット目、店の奥からハーフ嬢五人のダン
スを撮り、ショー越しに入口角の柱にもたれ
て腕組をし中の様子を伺う石野さんを撮る。

「ハイやってみまゝす」

リハーサル前の練習が始まつた。

ハーフ嬢が舞台に出て踊り出した。その時！

「リナちゃーん」やけに大きな声が出た。

声の主は——例の変なおっさんだった。

いつの間にか移動して、石野真子さんの左
肩越しのボックス席に居た。ライトが真子さ
んと、変なおっさんを照らしている。

自分が写る席を陣取つた変なおっさんは、

我が意を得たりとばかりに、人が変わったようにリハーサルの時から大張り切りだ。身を乗り出し手を振り「リナちゃん」彼のお蔭か？皆んなも盛り上がり、リハーサル、本番と順調に進み撮影は終わった。はしゃぐ姿、無邪気な顔、実に嬉しそうな、変なおっさんがやけに印象的な撮影だった。

『スタジオを出て帰る途中』

阪神高速に愛車を走らせていると、携帯電話が鳴った。事務所からの電話だった。

「世森さんの携帯ですか？」

「はい、そうです」

「明日の件ですが変更です」

撮影が無くなったのかと、ガクツと来たが、

「NHKに行ってください」

「はい、ええ！」

「NHKメイク室前に十四時集合、甘辛しゃんの、蔵人役、ジャージを持参して下さい」

「ジャージですか？」

「そうです。トレーナーでも構いません」

「はい、了解、OKです」

帰りにスポーツ店によってジャージを購入。

「甘辛しゃん」朝ドラの撮影や、楽しみやな。

翌日NHKに到着すると、メイク室の入口の前にあるソファーで2時間も待たされた。

「スタジオに入ります、着いてきて下さい」

「おっ、やっと出番か」

待ち疲れてやや腰が重い、メイク室に入り下に降りると、休憩所に長椅子、右にトイレ、今まではここまでしか知らなかった。

もう一階降りて、そう広くない廊下を突き当たって左に入ると、テレビで見た酒蔵と母屋と納屋と崩れた震災後のセットがあった。

「凄い」リアルな現場に思わず固唾を飲んだ。

「暫く、ここで待って下さい」小声で言う。

セットの中央で万作さんと、元杜氏が腰かけて話し合うシーンを撮っていた。

映画のスピーカーで聞く声と一緒にだった。

「カット」——OKが出た。

「お疲れさま」と挨拶すると、大場さんは爽やかな笑みで「おつかれさま」と答えた。

いよいよ、私たち六人もセットに入った。

震災後のリアルなセットに感心させられた。

庭の大きなクスノキもある。

スタジオ内は土埃で充満していた。

ときどき小型の散水機で水をかけるが役に立たない、スタッフの中には、マスクやハンカチで口を覆ったりして居る者もいるが、俳優たちは誰もそんなことはしていなかった。

あら、よく我慢がするなこれがプロ意識か、どんな状況を具体的に言うと、夏に地道を車が走ると砂ぼこりが上がるが、その時のホコリ臭さと――同じ状況なのだ。

震災で崩れたセットには本当に驚いた。

大道具さん、小道具さんの技術と舞台美術担当者との結集であろう。

私がい実際に目にした震災の後、古い家が崩れていたのと全く同じ光景だった。

やがて、蔵の入口に六人が集められた。

サブDが撮影するシーンの動きを付ける。
台本片手に事細かく、一人一人に立つ位置、
行動を指示する、台本には、ト書きとセリフ
そしてそのカットの絵コンテが書いてある。

中庭にお酒のケースが積まれてあった。
二人（私と寺岡）は、ここと此処に立って、
二人（青年部）は入口の、そこ、そこです、
後の二人、（東俳）は蔵の中、ヨイでお酒
を持って、スタートでこのお酒が積んである
所に置いて下さい、あなたは蔵に戻ろうとす
る。その二人は蔵の中へ入っていく、中に
居たふたりは、お酒を持って出てくる。

身振り手振りで動きを指示していく、泉ち
ゃん（佐藤夕美子）が「待って」と言います。
蔵に入ろうとしているのを「おいちよつと」
呼び止める。何があったんだ！どうしたんだ
と、出て来て、こここの、この立ち位置から、
どうなったんやろう？といった表情で見る。

泉ちゃんの「風が入っただけや」のセリフ
の後、二人はケースが二段積んである場所に

動いて、酒ビンを調べる格好をして下さいと、撮影シーンの段取りと演出をしてくれた。

頭の中でシミュレーションをしていると、チーフとサブが険悪なムードで意見を出し合っている。真剣になって言い争っている。

「だったら今日の蔵人さん要らないじゃないですか！」

「じゃ、こうすれば良いんだろう。何言ってるんだよ！」——と意見を言い争っている。

——何故か？二人とも関東弁だ。

緊迫した空気何日間も続いた撮影が大詰めに来ているし、放映時間は迫るは気はせくは、苛々してくるのも無理はない。

製作に取り組むマジな姿勢の現れだ。

ぼくたちは、素直な態度で演出家の気持ち逆なでしないようにしようと思った。

リハーサルを通してやることになった。「はい、ちよつとそこ」ダメダシが出た。

チェックをして、立つ位置、動きを変える。泉ちゃんの「待って」と言うセリフの間と、

蔵人の動きが合わなかったようだ。

チーフとサブが又、何か話し合っている。
蔵人の動きをもっと短い動きにしたいようだ。

結局、私は、しゃがんで置いた格好から、
三人は中に入ろうとする。中の二人は蔵から
出てケースを持って立っている。

私は頭の中で反芻した。
置いて戻ろうとする、泉の声、呼び止める、
怪訝そうな顔で、酒のケースに行く、ビンを
持って見る。撮影は足ったこれだけである。

「リハーサル行きます」

5、4、3、2、1、キュー、バタバタ！

女優さんのセリフ、埃のことなど忘れて、演
技に夢中になっている。

「カット」ダメダシが出る。

NGが出て誰のせいなのかを見回す。

「そこ、かぶっているから」

酒のケースの周りの蔵人の立つ位置を、左
に寄るようにと指示が出た。

カメラは酒のケース越しに、真っ直ぐこち

らに向いている。間違ひなく写ると確信した。最後の方はカット割りで撮る事になり、ビンを調べているシーンが別撮りになった。

一方では俳優さん達との打合せだ、チーフディレクターが演出のコンテを出す。

チーフDがぱたぱたと歩く度に埃が上がる。こんな現場でセツタを履いているとは、お前はバカかと――私は思った。

スタジオ内は、大勢のスタッフと俳優さんでごった返している。相変わらず埃が立って充滿している。散水器で噴霧したところで、何の役にも立ってない、目も鼻も口も開けていられない、上着が埃で白くなってきた。

私の左側に大きく地面に崩れた屋根の軒先の傍らで、堀ちえみさん馬淵晴子さん、二人が立ったままじつと指示を待っている。

ケースの積み具合、横、縦、高さ、三段にする。と役者とかぶるので二段に決まった。リハーサ前にあらゆることを検討する。

本番は一発で決まった！

『続いて次のシーンの撮影』

すかさず、次の撮影の準備に取りかかる。あつという間にセットを片付けた。

中庭の真ん中に、焚き火用の一斗缶、一升ビンの空箱を逆さにして、椅子変わりに七席、おにぎりとお味噌汁、カメラが五台、スタツフが段取りをしている。私達はサブDの説明を聞く、「震災後の寒い朝です。火を囲んで炊き出しを食べています。「水が来たぞう」と走ってきました。知らせを聞いて、水を運んで来た人の方に、二、三人が走って行く――ここまですをランスルーで撮影します」

もうワンシーンに出れるとは！「ラッキー」
「こつち来て座って下さい――」と指示。

エキストラ六人と男優一人が空箱に座る。走って来るのは課長役の男優で、おにぎりは堀ちえみさんが配る。お味噌汁は堀ちえみさんの旦那さん役が配る。

ここまでの動きをチーフDが演出をする。

ここでまた。サブと口論になる。

「台本をもう一度よく見ろよ」

座る空箱の位置でもめているようだ。

「ここ、こうなってるじゃないですか」

「全体の雰囲気を言ってるんだよ」

結局、箱を二つ後ろに下げて決着が付いた。

おにぎりも味噌汁を入れる発泡スチロール製の丼も、サララップで覆ってある。

演出は、堀さんがおにぎりを配り始める。

チーフDが旦那さん役の俳優さんに、味噌汁を注いで渡す。直後に課長が走ってくる。

それを見て：、云々打ち合わせする。

課長に走ってくる動きをやらせて見て確認。

「それでいいです。一回やってみます」

リハ前の通し稽古。「キュー」

おにぎりを食べる仕草をする。

堀さんが「お早う御座います、寒いですね」

小声で言いなが おにぎりを配る仕草、

旦那さんが味噌汁を配ろうとする仕草、

タイミングを見計らい課長が走り出す。

「水が来たぞう」「おう」「そうか」
全員が立ちあがり――走って行く。

「はいカット、――うん！二人は残って、あとの人だけ走りましょうか」

ここは、こうしよう、とチェックが終わる。
「味噌汁を二杯注いでからでは、間にあわないので、一杯目は先に渡しといて、注ぎょうとしているところから動いて下さい」

「それで行きます。スタート」
美味しそうにおにぎりを食べ始める。

「カット、戻って、何やってんだよ」

また何やら揉めて、チーフがサブを怒鳴る。
「一生懸命なんだからそんなに怒らないでエ」
やんわりと優しいく言って、堀ちえみさんの旦那さん役の俳優さんがその場を和ませた。
俳優の長い顔を見て、私は、ほくそ笑んだ。

おにぎりは一噛みしたまま本番が終わった。
一応本番は撮り終わったが、課長が、走って来て止まる位置を何度もやり直される。

停止位置に靴で線を書き目印を付けるが、

皮靴だからほこりの上を滑ってオーバーランをしてしまう。わずかなことだが撮り直す。

「水がきたぞう」を息せき切って言う。

演出チェックをされ、ようやく「OK」だ。

馬淵晴子さんの演出は、井戸の傍で、落胆、憔悴の顔で立ちすくむ、そのアップを撮る。

一度目撮ってチェックし、二度目の時は、チーフDは平身低頭、もう一度お願いします。

——不機嫌そうに見えた顔が良かったのか？

顔のアップ撮りのOKがでた。

そして、そんなにこだわる必要があるのか、

「おう」「そうか」「水か」「来たか」

それぞれが言いながら走るところを撮った。

走って通るところを三回もやらされた。

やれやれ、どうにか撮影は終わった。

今、撮った映像をモニターテレビで見る。

エキストラの六人が画面に写っていた。

「お疲れさまでした」「お疲れさま」

スタッフ全員と挨拶を交わして帰る。

私達の演技指導を担当した。サブDは納得し

てないようで、お疲れ気味の顔に見えた。

「ガンバッテや」とつぶやく。

NHKでのエキストラの仕事が終わった。

2分ほどのシーンに一日がかりだった。

後日、某タレント事務所のスタジオ待合所、

「世森さん、甘辛しやんに出たんやねえ、見

たよ、壊れた酒蔵の前で映ってましたでえ、

おにぎりを食べてるところも見たよ」

「ありがとう、ぼく見てへんねん」

『初めてのCMオーディション』

前の晩の七時頃、私の携帯電話に、明日の

二十時に、某タレント事務所のAスタジオで、

サカイ引越センターのCMオーディシ

ョンがあるので行くようにと連絡が入った。

注文をしてたスーツを受け取りに行った。

LANCELのダブルとシングルの二着を、

張り込んで買った。カラーシャツとネクタイ

もコーディネートしてもらい購入した。

ダブルのスーツを着こんで大阪に向かった。

Aスタジオに入ると既に、同じ事務所から十二名、他の事務所からも何名か来ていた。

CMのオーディションは初めての体験だ。来ている連中の顔ぶれを見渡すと何人か顔身知りがいた。「お早う」軽く挨拶を交わす。服装はラフな格好をしている人が多い、オーディションに慣れてるように見えた。みんな手ごわそうだ。雰囲気には飲まれたら負けや、勇気を出して頑張らなきゃ。

「これに書いて下さい」

担当者が審査員に見せる用紙を机に置いた。世森友・五十一・百七十・九十七・八十・九十三・二十五と体の各サイズを記入した。

得意なものに、ゴルフ、出演作品に絆・甘辛しやんと記入した。ポラロイドカメラで顔を撮る。出来た写真を用紙に貼って提出した。

隣のAスタジオでオーディションだ。

六人が呼ばれた。私は六人目だった。

「入って下さい」

「お早う御座います。お願いします」

椅子が六脚並んでいて、一番端の席に着く、トップでなくて良かった。前の人を見て要領を掴むことが出来る。「シメシメ」と、思った。

審査する人は皆若くて三十代に見えた。一人が立ちモニターカメラが設置してある。向かって左手に机と椅子が用意してあり、その上にサングラスが置いてあった。

机の前に立って自己紹介をして、キヤステイングのために何を演じるか説明を受ける。

「えーとですね、貴方は評論家です。今、何かに付いて討論しています。その内の誰か一人が言っている事が取り留めの無い、何の解決にも成らない事を言っています。それを聞いて『ところで、何を言っているんですか』と呆れ顔で、無視した態度で言っして下さい」「ハイ」と頷くと、1番目の受験者に――。「はい」どうぞ、すぐにキューがでた。サングラスを掛け机に両手をつけて――。

「ところで、何を、言っているんですかあ」

「サングラス無しで、言っ見て下さい」

もう一度、短いセリフを言って終わりだ。審査の人が、「はい」と、言っとうなずき、手で引き取ってもいいよと、促される。

「次どうぞ」二人目は、京都にある芸能プロダクションから来ていることが解った。

その方も同じセリフを言わされる。

「お宅、出身は九州ですか」

「いえ、四国です」

少し訛っていたのだろうが、私には、その違いがよく把握出来ていない。

三番目、「うん、ハードボイルド風だね」

「もう一度」同じセリフを言わされた。

——審査の三人、納得したように頷く、四番目、「大阪弁の言い方ですね」

そう言われて、その人は狼狽していた。

私には、どこが変なのかはつきり解らない。正しい発声のレッスンを受けたのに、駄目だな、緊張感が襲うドキドキして来た。

五番の人が済んだ。私の番が来た。済んだ人は出て行き、入れ替わりに入ってくる。

落ち着け、胸を張って堂々としろと自分に言い聞かせ、プロフィール用紙を胸に立った。

「私の名前は世森友、隣の事務所から来ました。宜しくお願いします」

隣の事務所から来ました。がウケたようだ！一礼して用紙を渡して、椅子に座る。

イメージを浮かべ、間を置いて相手を見た。

——手でスタートの合図を送ってくる。

私は机の上に両手をつけてから偉そうに、

「ところでエ、何を、言ってるんですかあ」

「——お宅、どちらですか」

「おかしかったですか、能登出身ですわ」

「——うんそれでか」

納得したかのように頷いてから指示が出た。

「サングラスを取って、ところで何を言っているんですかを、もう一度、言って下さい」

——イントネーションの違いが解った。

今度は訛らずにちゃんと言えた。

「結構ですよ」

これでキャスティングが決まるのだ。

終わった。――残念ながら手応えは無かった。張り切って行った割りにはアカンかった。

それから二、三日の間、

「ところでエ、何を、言ってるんですかあ」
このセリフが頭をリフレインし、口を突いて出る。――CM撮影の連絡は来なかった。

♪明日と言う字は明るい日と書くのねえ
若いと言う字は苦しい字に似てるわあ♪

「あーあ、若くもないか――（笑）」

『次のオーディションで』

審査する側の人「高い所は大丈夫ですか？」
受ける側の四人「はい、大丈夫です」

「ビイビイビイーと言って、各家庭に電波を飛ばすイメージで演技をしてください」

中身の無いまたしようなないパフォーマンズ、最近のCMは物語制がない、突拍子も無い以外制というか、奇抜なインパクトだけや：：

一番の人は、腕を伸ばし左右に振りながら、
「ビイビイビイービイビイビイビイビイー」

「今度は、立ったままやってみてください」
彼はもう一度、指を広げ腕を前に出し左右
に振りながら、ビイビイビイを連呼する。

「はい結構です」「次の方」どうぞと言われ
て、私は、前に出て両手の一差し指を立て、
頭のとっぺんから右に左に前に後ろに、飛
び出していく電波の光が、各家庭に届いて行
くイメージで、あっちにこっちに身体を動か
し「ビイビイビイビイビイビイビイ」
今度は立ち止まって、指先だけで飛ばす。

「はい、結構でしたア——冷たい雰囲気。
しようもないことさせやがって、私の脳裏
に冷めたもの、チョツと白けた感じがあった。
相手もそのことをよく見抜いて、どうでも
いいような受け答えを返した。よって落ちた。

※演技とは心をよせかける事である。

※演技とは心を投げ出す事である。

※演技とは内から湧き出る表れなのである。

と教わったがやるとなると難しいのだ。
ゾンビのような動きをした一番が受かった。

『西村京太郎邸での撮影現場』

『おどろきももの木二十世紀』のロケ現場。京都市東山区清閑寺雲山町三十四番地の二、山村美紗邸の左隣が西村京太郎邸だった。ここでのパーティーシーンの撮影である。

エキストラはジャーナリストや編集者の役、山村美紗さんが、派手なドレスを着て、階段を降りて来て茶目っ気たっぷり、階段の途中でポーズをとる。下から見ている皆さんがノリノリで拍手を送る。撮影はそれだけだ。

本番の時、推理作家の西村さんは偶然にも、私の真後ろ、『行き先のない切符』私が読んだことのある本を書いた作家が真後ろだ。

高価そうな猫が三匹入っている大きなゲージは六畳ほどの広さだ。パーティーをするために改装された部屋は天井が高く、広い、間口の広い玄関から入って左手に階段があり、二階は吹き抜けになっていて下を見下ろせる。

私などが、有名作家の家に招かれることな

ど有り得ないので、感激して嬉しかった……。――五十歳に成って、今日を何気に過ごし、そして、どうってことのない明日を迎える。そんな刺激も感動も充実感も無い毎日を変えたいとつくづく思うようになった――。

色々なジャンルのスポーツ選手が、明日の試合のことを聞かれインタビューに応じているのを見聞きして羨ましく思うことがある。

明日に夢を託す。明日に人生を賭ける。メイクドラマが待っている。そんな明日はそうざらにはない、でも、目的を持って向かっていればいつか夢が叶う。感動的な明日が来る。

今日は嬉しい出来事があった。嫌なことがあった。仕事が上手く行った。無事過ごせた。さて、明日はどんな一日を過ごすのか……？

今日があることも、明日が来ることも当たり前だが、何れにせよ溜め息が出ない日々が望ましい、日々の雑ごとに追われ、惰性とマッネリで無駄な時間を過ごすのはもう嫌だ。

感動的な明日が来る。そんな人生に変えた

いと言う思いから、「明日をどう生きる」をテーマに違う環境を求め一念発起したのだ。

『エキストラの経験で』

エキストラは自然の木や石、草と一緒に、出演者のバック役で、足とか背中だけというところもあり、端役のその又端なのだが、しかし、製作には欠かせない存在で、映像作品の撮影に参加できたことの満足感はある。

某タレント事務所から仕事の依頼を受けて、いろいろな撮影現場の体験をしてきたが、ほとんどその他大勢のエキストラだ、少人数の時でもおいしい役は貰えない台詞も無い。

フロアディレクターかサブDかADの指示で観客になったり、通りすぎる人をやったり、店の客になったりだが、撮影現場は興味深くて楽しい、待たされるのが辛いけど……

「リハールサル」「はい、本番」「カット」

「チェックします」「OKです」

「お疲れさまでした」挨拶を交わし帰る。

撮影が終了し現場から開放されたときの、
なんとも言えない緊張と緩和が妙に癖になる。

この瞬間の達成感の嬉しさがたまらない！
「やったあ〜」——という気になる。

あえて言うならば製作に加担した一人である。
映って入ればそれでいい、次は少しはましな
役が来るようにと願う……。

明日をどう生きるは、マンネリ人生を打破
しようとの試みだがどうなることやら……。

『セリフのあるお父さん役』

事務所からの電話——。

「——世森さんですか——」

「はい、そうです——もしもし」

「明日十七時四十五分、関テレの正面玄関に
行って下さい」

「はい、どんな内容ですか？」

「再現VTRの出演者オーディションです」

「——あっ！ハイ」

「受かった場合、十二日が撮影日です」

「日にちがないですね」

「その日も空けといて下さい」

「えエ！ ハイ了解しました」

今度こそ受かりたい「明日はやるぞ」

オーディションで選ばれ関西テレビの新番組

『あなたにありがとう』の出演が決まった！

再現VTRのロケ撮影で主人公の父親役だ。

セリフがあり、初めて俳優らしい撮影現場を体験することができた。

しかし、オンエアを見てガツクリした。

撮影したカット数は半分に編集されていた。

ほとんどがボツで端折られていた。

お父さん役の私はどう見ても五十点以下の演技だった。台本では、たった一行のセリフのほとんどがボツだった。

若い二人に子供ができて会議が始まった。

娘の母親役「どうか、この子を不憫に思っ
て、ここで一緒に住ませてやってください」

父親役「私たちは、こんな所でよかったです、
来ていただいても結構なんですけど——よう

は、隆浩の気持ち——ですよね」

オンエア—では「ようは、たかひろのきもちですよね」の部分だけが使われていた。

下手クソ過ぎて恥ずかしい、悔しくて、な
さけなくて、反省しまくった。

撮影現場は嫌だなあと、思う事も随分あるが、
良い事もある。それは、行ったことの無い場
所や、滅多には入れない建物の中での撮影や、
普段はお目にかかれない、有名な俳優や芸能
人と一緒に撮影現場を体験することである。

エキストラの仕事があれば現場に行き、
CMのオーディションの指令は全部受けた。

株クリエーターズユニオンで、アサヒ生一
丁のCMオーディションを受けたが落ちた。
あれもこれも落ちた気長に頑張ろうと——。

『ある日の撮影現場で』

クラブのボックス席に座るように言われた。

遊びに来ている客の役だ、あつ役じゃない、
客の代わりをして座っているエキストラだ。

スタジオで習った先生の教えを思い出した。「演じるとは日常の再現である」

写っているかどうかではなく、このシーンに必要な絵の中の一つ、大切な背景の役割を担って、このシーンに参加しているのだ。

客になりきることがエキストラの心構えだ。監督は演出などしちやくれねえし、エキストラに気を回すなんてこともありえない、

A Dさんが、こうしろああしろと指示を出すだけである。名前すら呼んで貰えないのだ。「おとうさんはここに座って」

これから撮るシーンを通して、全体の動きの説明があつて、リハーサル「ヨイ、パン」の手拍子で、私はたばこを口元へ、ホステス役が火を点ける、ふかしながら客役のおっさんと口パクで、会話をしているフリをする。

主役のセリフが終わると、エキストラのお客役の一人が席を立ち去って行く。「カット」

ホステス役に、スタートから店内の通路を歩き出す位置とタイミングにダメ出しが……。

セリフの言い回しにもチェックが入った。イントネーションとか間が難しい、セリフに気が入っていないと、その場の雰囲気やリアルな感じが伝わってこないのである。

監督の熱のこもった演技説明には納得した。側で聞いていてなるほどと勉強になった。

撮り終わるまで緊張感が続くが、不自然にならないように普通にやればいいのだが、普通に通にすることが、カメラの前では難しいのだ。短いシーンでもカットでも、心の底から気が入っていないと、セリフも動きも不自然で、カメラを通してモニターに映し出されると、良いか悪いかが、ハッキリと見えてしまう。

『ある日の松竹株式会社』

松竹撮影所の十五番の楽屋で、ロケバスが出発する時までエキストラが待たされていた。外は本降りの雨、風も出て、次第に激しくなり、風雨の音が楽屋まで聞こえていた。

役の衣装に着替えさせられて、スタンバイ

している者も居る。場内アナウンスが流れた。
「シ、静かにして——みんな聞き入った。
「本日のロケは雨天のため中止になりました」
「せっかく朝早くから出て来たのに残念や」
私は心にも無いことを言いながら、とつと
と帰る用意を始めた。医者 of 衣装の人は、残
念がって「延期やな、この分の撮影いつやろ」
と、暫く、名残り惜しそうにしていた。
患者役は「又、来んとあかんのやろか」

「今日のギャラは——出るんやろか」

私は嵐の様な雨で中止になって嬉しかった。
中止の理由は、シーンが二つあって撮影をい
っぺんに済ませたい、屋外の撮影はこの雨で
は無理、亀岡を二度も往復するのはロスと判
断し、日時をずらすことに決定したのだ。

次の日、NAC事務所から連絡が来た。

「中止になった日本暴力地帯の件ですが——」
昨日と同じ顔ぶれでないと駄目なのかたと、
思いつつも、ロケ先が遠いのが辛くて、体調
不良を理由にし断ってしまった。

「このNGは事務所の心証を悪くしたかな」

後日、このロケに行った連中の話を聞いた。

二度目のロケに参加した。患者の衣装の人は死体の役で安置所へ運ばれたんだと聞いて、

「そうやったんか、行かなくて良かった」

手を叩いて嬉しがると、行った方は憔悴顔で

「えらい目に会ってしもうたわあ」

抜けたあんたはずるいという目で私を見た。

「エキストラはつらいよな」

「おいしい仕事はないもんな」

「何をさせられるかわからへんし」

二人の話を聞いていた傍の人が喋り出した。

「この間、首領への道、行ったんやけどな、

雨のシーンでな、ホースで水を上からジャー

ジャー撒いて、その下を走らされ、なんべん

もやらされ、終わったら全身びしょ濡れや、

寒くて風邪引いてしもうたわ」

「えっ着替えはどうしたん」

「上は借りた衣装やったけど、下着は用意してへんがな、新品のパンツを一丁づつ配って

くれただけやがな、エライ目に会ったでえ」
「ほんまあ、参るなあ、ウワツハツハ」
とかく、他人事は面白くて笑ってしまう。

『NHK水曜シリーズドラマの撮影現場』

今日のロケ現場は「月日亭」という、奈良では知る人ぞ知る有名な料理旅館である。

お忍びで利用する有名人も多いと聞いた。

JR奈良駅を出て右の噴水の近くにあるタクシ―乗り場で同行するえキストラを待った。

「タクシ―で行くんかいなラツキー」

間もなくボデイーが緑色のタクシ―が来た。

運転手に行き先を告げるが、同じ屋号がもう

一軒ありどっちなのかはつきりしないという、

本日の付き添いである、マネージャーの谷

本さんが急いで携帯電話をかけ調べ直した。

「つきひていです」「分りましたです」

運転手が了解し、市街地を抜けると、修学旅行で来たことがある若草山が左手に見えた。

山裾を右廻りで車は登って行く、若草山の

中腹の裏手から右の山道へと進んで行った。
アスファルト道路が地道に変わり、轍のあ
るゆるやかな坂道をタクシーが登って行く。

薄暗くなり、急に山の中へ入った感じだ。
目の前の景色が一変した。右下は浅い谷で、
大小の岩が見える溪流を水が流れていた。

杉の大木、もみじ、桜、ブナ、カシ、シイ
類など、常緑広葉樹林の木々が道を挟む様に
生い茂っている。駅からそんなに離れていな
いのに、森林浴が満喫できる。素晴らしい自
然の「春日山原始林」があった。山道の空は
枝や葉が覆い茂り、緑色の高い天井のトンネ
ルの中を走り抜けて行くような感覚だった。

見上げると幾重にも覆われた葉の隙間から、
キラキラと光がこぼれ落ちてくる。生い茂っ
た木々の葉が淡く緑色に輝き、青い空が葉の
隙間から透けて見える。しつとりと落ち着き
のある空間に――しばし感嘆！。

「ええとこやなあゝ」

その先をしばらく行くと、道幅が広くなり、

前方に「月日亭」の文字が見えてきた。

タクシーは門の手前の左の広場に止まった。初めて訪れる風光明媚な光景に辺りを見回し、目はキョロキョロ踊り、心はワクワク弾んだ。門から先はコンクリートの急な坂道である。一歩一歩腰を折るように登って行くと、バツクザフイーチャーじゃないけれど昔にタイムスリップしていくような感覚だった。

庭先に一歩足を踏み入れると、歴史を感じさせる数寄屋造りの佇まいが、廻りの自然の景色の中に溶け込むように建っていた。

ロケ隊より先に着いたので静かだった。桜の木や大きな杉の木、庭木すべてが時を経て落ち着きのある風情をかもし出していた。

都会との縁を拒み物静かに、昔の風情をかたくなに保ち続けているといった様子だった。――女将らしき人が出迎えてくれた。

私達三人を離れの部屋に案内してくれた。外の景観に目を奪われている私を見て、

「紅葉の時期はきれいですよ」と言った。

機会があつたら、また来てみたいと思った。

「夕べお客様が大勢いらつしやつて、今は、こちらの部屋しか開いていませんので、恐れ入りますがこちらでお待ち下さいませ」

母屋に案内できないことに気を使っている、女将さんの丁重な心配りに恐縮してしまい、「いいえ、もったいない有り難う御座います」

女将は撮影の出演者と知ってか？エキストラに控えの部屋を提供してくれたのである。

エキストラが、このような待遇を受けることは稀有なことなので嬉しかった。一息入れようとタバコに火を点けて気を落ち着かせた。

マネージャーの代役の谷本さんが何かと振る舞いに気を付けるようにと小うるさいから、落ち着いていられない、この業界の厳しさや掟を気づかっつて、大袈裟だが緊張し過ぎて、おどおどしているように見える。

メインの役者が来た時に、この部屋に私達が居てはまずいんじゃないか、先に占領していると反感を買うんじゃないかと心配なのだ。

彼は気付いていないようだが実によく喋る。

訂正言葉を使っては会話が続く、事務所に居る時は融通の利かない石部賢吉で、ガチガチ男完璧主義者なのだ。ある日の事務所内で、「はか行つて来ます」と真顔で言っているので「墓？」と聞き返すと、「歯」だって、

齒科しかと解り、呆れたという笑い話があった。

それを聞いて以来、彼が真面目に喋っていても聞いている内に、心なしかこっけいに思えてしまい親近感をおぼえる。

くつろぐ間もなく、外が騒がしくなつて来た。ロケ隊が到着したようだ。

「女優さんたちの控室になるから早く出よ」
谷本さんがせきたてる。言われるまでもない
バックを持って、慌てて玄関の上がり口に出るやいなや、玄関に一行が入つて来た。

「お早う御座います」「お早う御座います」
来る人、来る人に、挨拶を交わしながら、
急いで靴を履きあたふたと外へ飛び出した。

女優の香川京子さんと、もうすぐ春です
ねと歌っていたスウーちゃんとすれ違
った。

『二つの愛』のドラマの中で、田中好
子さんは沢田研二さんの妻（雪子）の
役なのだ。

庭内は人と器材でゴタゴタしだした。

若いスタッフ連中が着々と準備をして
いる。それぞれの担当者はプロであり
職人である。

撮影準備の邪魔にならないよう庭端
の桜の木の下で待機する。スタッフが
近づいて来て、「呼ぶまでロケバスの中
で待っていて下さい」

決して丁寧語には聞こえない指図で、
仕事の邪魔になるからあっちに行け
って言われたように取ってしまう。エ
キストラの扱いに不満を持つヒガミ
根性がそう思わせたのだ。

座って待てるのだからいいとしよう
か。ロケバスのシートに腰かけ話を
していると、タクシーが到着し、のっ
そりと男が降りた。

沢田研二さんだ！急坂を二日酔いか
寝不足の時みたいによたつてだらだ
ら登って行く、ジャケットもタクシ
ーの背もたれで皺になり

よれよれ、ダーリンダーリンと唄いながら、
——どこか気だるそうな雰囲気に見えた。

「今日は沢田研二も一緒か——」と思った。

バスの中で待つこと三十分、連絡が入った。
「すぐに上がって来て下さい」

やっと出番が来た。

カメラ、照明、マイク、全てがセットされ、
監督以下総勢二十七人のスタッフ、一瞬緊張
感で身体が金縛り状態になる。

まずは衣装のチェック、衣装係りのイメー
ジには程遠い凶体が大きい岡ちゃんが近づいて
きた。初めてNHKの衣装室に入った時、不
機嫌そうな口調で、ぶっきらぼうな言い方に、
ちよつと怖い苦手意識がある岡ちゃん、何かを
言われたらどうしようかと内心どきどきする。

事務所からは、時期は六月、旅行をする格
好をして行って下さいと言われていた。

私の方を見て、うんうん頷き、OKが出た。

私の相手役の日野ちゃんは引っかかった。

今時の若者の超ミニファッションは、岡ちゃん

のイメージには合わなかったようだ。

こっぴどくダメ出しを食らった。

「旅行カバンは、それ、上着は、遊びに来たんじゃないんだから、その格好ではアカンな」

スタッフの女性に、着替えはないかと陰悪なムード、日野ちゃんがシユンと泣きそう。

なのに：本気とも冗談ともつかないことを言った。小道具さんか助手か解らない女性に、

「お前の着ている物脱いで着替えさせろ」

――回りのスタッフ全員が含み笑いをした。

私は日野ちゃんの顔色を伺いながら、無茶言うなと思っていたが、回りのスタッフの反応を見て、仕方がない今日はこれでいくかと諦め、しぶしぶ許そうと思った気持ちを、あんな言い方で表現したんだなあと解った！

ぶっきらぼうでつつけんどんな奴やだと思っていたが、厳しい言い方は、何事も真剣にやる心構えを身に付けさせる為なのだろう。

この一件で岡ちんの間人性や優しさを垣間見たような気がした。小道具さんが、適当な

旅行カバンを用意してくれた。

「こんな不倫のカップルもいてるやろう」

——スタッフの一人が言って笑った。

五十過ぎと二十過ぎの世森友と日野ちゃんが料亭のお客の役を演じることが解った。

今時の援助交際じゃないけれど、二人は朝帰りの不倫カップルに仕立てられたのだ。

役どころは事務所から何にも聞いていない。

不倫の役か悪くはないかと、日野ちゃんと顔を合わせ、にわかカップルが誕生した。

香川京子、田中好子、世森友と日野ちゃんの共演シーンの撮影が始まった。

香川京子さんが、私たちの前に登場した。

「お早う御座います宜しくお願いします」

出演者同士、丁寧に挨拶を交わす。

監督からこのシーンの全般の説明があった。

私達二人は、あがりがまちに腰かけ、靴を履いて、旅行カバンを仲居さんから受け取り、玄関を出て、女将さんと挨拶をして帰る。仲居さん役は月日亭のモノホンだった。

香川さんが玄関先を出たところに立って。

「ゆきちゃんお客様の帰りですよ」

田中さんが、路地から小走りやって来る。

私達は、監督の合図で靴を履き玄関を出る。

1・2・3・4歩——進んで止まる。

女優二人が出迎え会釈を交わす。

「ありがとうございます」

「どうも、お世話になりました」

1・2・3・4・5・6歩でハケる。

女優二人で片言の台詞があつて、香川さん

玄関から廊下を進みフェイドアウト——。

「カット」ここまでのシーンの撮影だ。

以上で私たちの出演シーンの撮影は終わり。

テレビの画面ではあつという間に終わるシー

ンであつても、撮影は時間がかかるのです。

テストテストテスト、本番手直し本番チェ

ックだめだし本番OKと、だいたいこうなる。

一度や二度NGがあつて当たり前なのだ。

今日の監督は、怒鳴ったりしない、やさし

い温厚なタイプの人で、私達の動きに指示を

出す時も、解り易く丁寧に伝えてくれる。

「――靴を履いておきましたよか」

「あなたカバンを持っていて下さい、二人が立ち上がったら歩き出して下さい」

それから女優二人の立つ位置や、一瞬立ち止まり会釈を交わす足もとの位置をチェック、小走りで来る田中さんの姿は私達には見えないので、ADさんが近づくタイミングを見計らって、台本を振り下ろし合図をくれる。

あがりがまちから立ち上がり歩き出す。

リ―ハでテストを繰り返してからいよいよ、「本番」五秒前4321カチンコが鳴る。

「ゆきちゃんお客様の皆様のお帰りですよ」

「はい」

田中（雪子）さんの下駄の音が聞こえる。

ADさんの台本が振り下ろされた。

私と日野ちゃん立ち上がる。仲居さんが二人のカバンを持って後に付く、日野ちゃん、私の右腕を抱え寄り添って四歩進んで止まる。香川さんと田中さんの前で会釈を交わして、

六歩でカメラマンとマイクさんの間をハケる。

女優さん二人台詞を交わす、香川さん、玄関から廊下を進み室内へとフェイドアウト。

「カット、チェック入ります」

監督がモニターを覗き込んでいる。

「NGです」廊下の奥の室内からこちらを見ている作業服姿のおじさんが写っていたのだ。

ああ残念ながら取り直しだ二回目の本番！

「でものはれものないか」

カメラに要らぬ物が写っていないかチェックをする時に、このような隠語で声を掛ける。

「ストップ」壁に集音マイクの影が見えた。

「本番」五秒前4321カチンコが鳴る。

演技が終わって、やれやれと思った瞬間に、

「ブブブブー」と大きな雑音が、音声さんの腰にぶら下げているブースターのような物か

ら突然に奇妙な雑音が出た。

「スママシーン」と音声さん、又「NG」だ。

このアクシデントに監督が笑ったので——スタッフ一同も笑い和やかなまま撮影は終了。

後で知ったことだが、医師で夫役の沢田研二は被害にあった人の治療に専念していた。医師の妻である田中好子が、神戸から四国の、とある旅館に身を寄せ、記憶喪失を装い、女将さん役の香川さんの元で働いていた。そこへ、沢田研二が妻を案じて訪ねてくる。その日の朝、客が帰るのをお送りしている場面に、私達は出してもらったのである。撮影場所は奈良だったが、物語の中の設定では四国にある旅館になっていた。

――1998年6月の、この日から、約十三年後に知った悲報、2011年4月、元キャンディーズの「スーちゃん」こと田中好子さんが乳がんで急逝された訃報をニュースで知った。旅立つには若すぎる。享年55歳だった――。田中好子さんが乳がんを発症したのは1992年で36歳だった。手術で左の乳房の腫瘍を切除する温存療法を選択した。その後は、定期的に検診を受け、何度か再発をしたが、いずれも発見が早く、命に別状もなく、芸能活動

を続けていた。と言うことで、『二つの愛』に出演中の時は、既に癌と闘っていたのだ。それを知って、あの日のスーちゃんの顔が思いだされ、ただならぬショックを受けた。――スーちゃん最後のメッセージの録音から、「きょうは2月26日、東日本大震災から2週間が経ちました。被災された皆様のことを思うと、心が破裂するような……破裂するよう痛み、ただただ亡くなられた方々の、ご冥福をお祈りするばかりです。

私も、一生懸命病氣と闘ってきましたが、もしかすると負けてしまうかもしれません。その時は必ず天国で、被災された方のお役にたきたいと思えます。それが私のつとめと思っています。きょうお集りいただいている皆さまにお礼を伝えたくて、このテープを託します。キャンデイズでデビューして以来、本当に長い間お世話になりました。幸せな幸せな人生でした。心の底から感謝しています。

とくにランさん、ミキさん、ありがとう。
2人が好きでした。映画にもっとでたかった。テレビでもっと演じたかった。もったもったと女優を続けたかった。

お礼の言葉をいつまでもいつまでも、皆様に伝えたいのですが息苦しくなってきました。

いつの日か、妹、夏目雅子のように、支えてくださった皆さまに、社会に少しでも恩返しができるように復活したいと思っています。かずさくん、よろしくね、その日までさようなら」と音声が残っていた――。

「心からご冥福を御祈り致します」

『二つの愛』この連続テレビドラマを見ていたのに自分の映ったところは見落とした。

まばたきをしている間に終わったのか、もしかしたらボツかも知れない、ビデオ録画をしておけば良かったのと後悔した。

ところが、数日後にスタジオへ行った時に、
「世森さん、写っとったで」

「見た見た不倫してるとこ」

「ありがとう見てくれたん、うれしいなあ」
エレベーター前の待合場所で同期の女性が
言ってくれた。見た人がいたので嬉しかった。
経験をした者にしか解らないだろうなこの
気持は？ だが所詮、一人良がりなのだ。

『CMのオーディエション』

福井県の家具屋さんのCM地方版だった。
あらかじめ書類選考で選ばれた中で、男性四
人と女性二人でのオーディエションがあった。
オーディションルームは、どこへ行っても、
六畳程の小さなスペースで行われる。

娘の婚礼家具を物色している設定である。
即席の夫婦を組まされて寸劇をやらされた。
演技も台詞も全てアドリブでやらされた。

二人でちよこちよこつと打ち合わせをして、
演技を始めた。洋服ダンスを開け中を見て、
「丁寧な仕事をしているなこれに決めよう」
「はい結構です」——冷たい反応だった。

オーディションは落ちた者には何の連絡も

来ない、受かった人にだけ連絡が入り、撮影日がいっになるか指示が来る。何も連絡がなかったので落ちた。

ああ言えば良かったか？　こう動けば良かったか？　いつも後で反省するばかりだ。もっとオーバーな表現を百二十パーセントのリアクションをやらなきゃ駄目なのだ。

ディレクターの意図している事を見抜いて、自分が持っているキャラを出してぶつける。

意気込みが大事だ。私達素人の出ているCMのオーディションは。天然のキャラがそのCMにマッチしていれば採用される。

タレントは個性、人間性、その人の演技力、そして、人気度で使って貰える。

エキストラは、その場の一発勝負なのだ。

短い言葉、短い動き、その一瞬で決まる。

「これや、このキャラ、この顔、この動き」
いいなあと、ピンと感じた瞬間に決まる。

CMのオーディションに、受かったことのある経験者は、自分では30%オーバーやな

と思うぐらいやらんと駄目だと言う。

選考する人の好みとか相性もあるだろうが、くじ引きみたいなものだからしやあないと、割り切っている方が気は楽かもしれない……。明日がある。明日又チャンスがあるさ。

『映画「梟の城」の松竹の現場』

「梟の城」（ふくろうのしろ）司馬遼太郎。

直木賞作品の映画化の撮影現場。

篠田監督、岩下志摩さんの御主人である。

京都松竹撮影所時代劇セットでのロケ。

この日は早朝五時起き七時半に撮影所集合。

どんな仕事になるか何の役がもらえるか、

心わくわく胸はどきどきはやる気持ちで出かけた。定刻前に着き控室に手荷物を置き早速衣装さんの処へ、いつもの衣装室ではなく外のプレハブの二階だった。

東京から来た着付け師が、一人ひとりに、いろんな役柄の時代劇衣装を着せていた。

紐の結び方、帯のしめ方、伝統を引き継い

だプロの仕事である。着付け師がボヤいた。

「京都は時代劇の本場と聞いていたのにさ、一人も自分で着れないんだからさ、東京のエキストラは着物は自分で着るよ」

と、言われて、私も着付けに無知であり教わっていない事を恥じかしく思った。

あらかじめ用意した衣装を順次着せていく。

「えっ、あなたこの役」

出面のプリントを見ながら言った。

キヤステイングミスだと思ったのだろうか、マネージャーが呼ばれて、話し合っていた。

しばらく話し合っていたが、うんうんと頷き仕方なさそうに、私の衣装を着せてくれた。

私を含め五人が薄茶色の裾の短い着物に白いきやはんの作業着で、人足風の格好である。

白装束の刀鍛冶職人、町民、武家、大店の主人、番頭、浪人風侍、遊び人風の侍。

着付け師が、何故か私に語り出した。

「今日は一年分の仕事をした。普段は配役の主演クラスを、一人か二人着付けるだけだよ、

一度にこんなにはしないよ。

この仕事覚えるのは大変なんだから、私の師匠はこうしろとは絶対教えてくれなかった。

「見て覚えろと、厳しいんだから」

ある日、いきなり主役の着付けをしてみろと言われてさ、初めてだよ手が振えてさ、間違えないように、なんとか着せ主役が部屋を出た時に、「良くできた」と褒めてくれた。

人前で言わなかった心配り、主役の着付けを半人前に任せるなんてことは失礼なんだよ、そう言う事なんだよ解る。嬉しかったよ」と、初対面なのに、何故そんな話をするのか分からなかったが、何事も一人前になるのは大変だな、良い話を聞かせてもらったと思った。

今日は忙しくて気持ちのやり場がなくて喋ることでのこの場のストレスを発散したのかも、屋外のセットに全員集合して、小道具さんの所で、地下足袋、草履、刀、巾着、かぶり物などそれぞれの格好にあった物を受け取る。

堺の鉄砲鍛冶の建物、間口が広く商家の佇

まい、右手が商談をする応接間で、奥が作業場になっている。その建物の斜め前方に、火のみ櫓があり、下が広場になっている。

そこにエキストラ達がスタンバイ、私達の外にポルトガル人の格好した外人達や、町娘やらで徳川時代に戻ったようだった。

中井貴一、小沢昭一さんらが登場する。

篠田監督が指示を出す。いよいよ撮影開始だ。

この日は松平健さんのテレビ時代劇の撮影と重なった。こっちが「本番」と言う toward こっちがシーンとなりあっちが「本番行きまーす」と手をあげ合図を送って来たらこっちがシーンとなる。こっちが本番の時向こうでガツタんと物が倒れた大きな音がしてしまった。

呆気に取られ思わずにが笑い、「おい、頼むで」とスタッフの一人が声を掛け本番再開。

最後のカットまで私の出番はなかった。と言うか、ガンガンの傍でスタンバっていたが、スタッフがこのカットに誰を使おうかと来る度に人夫の衣装で映るのが嫌だったから、

スタッフと目を合わせないように避けていた。それで選ばれなかったから干されになった。

それでもギャラは同じ、他のエキストラは配置に書いて指示に従い頑張っていた。

板の間でじっと座っていた木村さん、屋敷の前を通る通行人をしていた田村さん。

奥の仕事場で金槌を振っていた寺岡ちゃん。

他の役どころのエキストラもOKが出るまで真剣に撮影に参加していた。

寒い日だったので、私はガンガンの火の番をしながら撮影の一部始終をただ見ていた。

「彦根でもう一シーン撮ります。行ける人、遅くなっても構わない人、居ませんか」

A Dさんがエキストラの皆に聞いた。

私は目立たない様に後ろの方で身を隠した。手を挙げた中の三人が選ばれ満足気だった。

「頑張ってこいよ——と、

心にもない、しらじらしい声を掛ける。シラけた感じの、もう一人の自分が居た。

衣装を着たプレハブの建物に戻ると——、

私服に着替えたエキストラたちが、貸衣裳を脱いだまま、その場に置いて、そそくさと部屋を出て行く。「お疲れさあ〜ん」

脱いだ物を丁寧に折りたたんでいる着付け師の側で、たたみ方は知らないが一応浴衣をたたむ要領でたたんで重ねていると――。

「こんな時に人柄が出るんだよなア」

と言つて、着付け師が私に笑顔を見せた。

「干されでした」

と言うとやっぱりといった顔で頷き帰り際に

「お疲れさんでした」言ってくれた。

「お疲れさまでした。お世話になりました」

大きな声で挨拶を返して部屋を出た。

寺岡ちゃんと帰りが一緒だったので聞いた。

「篠田監督どうやった」

「やさしく演技指導をしてくれたでえ」

寺岡ちゃんは、目を細め嬉しそうだった。

『新赤かぶ刑事第七話の撮影現場』

「馬酔木の郷」（あせびのさと）亀岡の奥で

別荘地域の一軒家を借りてのロケだった。
松竹からロケバスに乗ってかなり遠かった。

この日はメツチャ暑かった一日中警察官の制服を着たままだったので辛かった。

赤かぶ刑事の橋爪さんは流石だった。

演じているとは思えない、赤かぶ刑事と言う刑事本人が殺人現場にいるといった感じだ。

「本番、五秒前、4、3、2、1、ハイ」

橋爪さん「（台詞を言う）：」

相方の刑事「えッ——それ前のシーンの：」

橋爪さんは、気づいて頭を抱えて笑う。

橋爪さんがNGを出してみんなを笑わせた。

先程撮影を済ませたカットの台詞を、澄まし顔でしゃしゃと言ってしまった。

蒸し暑い部屋の中が一瞬和み暑さを忘れた。

私は刑事役を現場に案内する察官を演じた。

事件があった家の玄関横にパトカーをピタリと止めて、すぐ降りて、刑事役に向かって、「こちらです」

撮影は暗くなるまで掛かり八時半アップ。

撮影に使ったパトカーで、大宮まで送って貰い帰途に着いた。馬酔木の郷は遠かった。

『テレビCMのオーディション』

某タレント事務所のスタジオで、図書券カードのCMオーディションを受けた。

カメラの前で自己紹介と、自己PRの売り込みをしてから、男性三人一組で演じた。

◎ || 本を読め読め子供達：「なんで」

◎ || ロクな大人にならへんで。

◎ || 大人になったら遊びましょ。「いやや」
「カッコの中は後で子供の声を入れる。」

実際にクダラナイ内容のコマーシャルである。男性十人女性十二人が受けたが私は落ちた。

アース製薬のオーディションを受けた。

三人ずつ呼ばれ、オーディションルームへ、ここも狭い六畳ほどの部屋だった。

自己アピールの後、絵コンテを手渡された。

絵コンテを見ると、エロっぽくてデカパイのOLに、部長役で抱き着き「吉田クーン」

デカパイの胸元目がけ突進して抱きすがる。
デカパイのOL役はADの女性が恥ずかし
いから嫌だと断るので、図体の大きい男性A
Dが、代役でOL役をすることになった。

前の二人の演技が終わり、あんな演技では
ダメだ。もっとオーバーにやらんと、小道具
に黒ぶちのメガネを掛けて、勢いよく胸元へ、
「吉田クーン」と言ってぶつかった。

ぶつかった弾みでメガネが落ちて壊れた。
オーデイションも落ちた。

新品の伊達メガネを一個、損しちゃった。
テレビCMの内容で時々思うことは、ボキヤ
ブラリーが貧しい、乏しい下品でくだらん、
だから作ってもボツになるケースが多い。

CMの有り方、コンセプトをもう一度ちや
んと考え直して欲しいとつくづく思う。
奇抜過ぎて訳の分からないCMが目につく。

「何とかせいでよ——と言いたい。

何度も見せられているCMなのに、あれ何
だった？メーカーはどこ、なんてことになる。

「――CMに出たいな〜おいしい仕事や！」

『天満の街中のロケ現場』

『ミナミの帝王』（主演、竹内力）

東西線天満宮駅一番出口の近畿銀行前集合。
通い慣れたビルの隣の銀行の前だった。

見たことのある顔がぞろぞろ集まって来た。

某タレント事務所から歩いて五分で、ロケ現場に着いた。店舗事務所を借りての撮影だ。

私の役は債権者の一人で、事務所の入口で、やくざ風二人と小競り合う場面を撮影する。

監督の説明を受けて早速リハーサル。

債権者役の一人が適当なセリフを言う

「二百万返せ、ど、どうしてくれるんや」

「やかましいわい、とつとと返れ」

私もアドリブでその場の雰囲気を出す。

「金返せ、貸したもん返えさんか」

「帰れ帰れ、痛い目に合いたいんか」

言い争いと小競り合いが暫くあって、そこ

へ主役の竹内さん登場、例の黒塗のベンツか

ら降り、つかつかつと私の横に割って入って、
「銭金は額の問題と違うんじゃない」
やくざに向かってドスの効いた台詞を言う。

リハーサルで、台詞を言った後しきりに額、
額、がくの、がくの、がクの問題と：

イントネーションの違いを気にしていた。
横で聞いていた私は、ぽつりと言った。

「ガクは絵の額ですね」
「がクの問題と違うんじゃない」

これで大阪弁完璧やなどニヒルに笑い、竹
内さんはスタンバイの位置に戻った。

リハー一回で次が本番だ。街頭でのロケは車
が通るは通行人が来るはで大変だ。

スタッフがロケ現場の四方に立って見張り、
通行人に頭を下げ、こっちにこないように、
向かい側を通る様にとお願いしている。

車は信号を見てトランシーバーで知らせる。
本番前、スママセンと停止をお願いしても、
「俺も仕事や」と怒り出す運転手もいる。
やむなく通すと、こんどは監督が怒鳴る。

タイミングを見計らって、4・3・2・1・「スタート」竹内さんがベントツから降りて来て、「銭金は額の問題と違うんじゃない」

「はい！OK」

次のカットは店舗内に残っている事務機器などをトラックの荷台まで運び出そうとしているのを阻止し、奪い返そうともみ合うカットの撮影で、私も加わることになった。

このカットは先に撮ったカットの続きになっているはずだと判断した私はわざと言った。

「先のシーンであそこに立って居たので、同じ立ち位置から、回った方がいいですよね」

監督の耳にも聞こえる様に、ADに訊くと、カメラの後ろに構えていた監督が怒鳴った。

「エキストラに言われてお前何してんねん」挨拶もせん、つつけんどなADが怒られた。言い返す言葉など無く「はい」しよぼくれた顔になった。――ほら見る私が正しかった。

少し勝ち誇ったような、気持ちになったが、この世界は上下関係が厳しいからADさんが

叱られて可哀相なことをしたかなと反省。

「ハイ、テスト」立つ位置を確認してスタンバイ「ヨイスター」の声で。

パソコンのキーボードを運び出そうとする。

「何してんね、どこへ持っていく気や」

パソコンやらコピー機を奪い合っている。

「ハイ、カット」

一発で！うまくいったようだ。

次のカットは債権者が、店内になだれ込んであドリブを言いながら適当に演じた。

「金目の物はないか、何か残ってへんか」

荒捜しをしているシーンを撮って終わり。

たったこれだけで、半日掛かりだった。

正午前アップなので弁当なし、四時間の間、拘束され指示を受け緊張したが、開放された後のこの爽快感はいったい何だろう……？

「ハマルで、くせになるで、エキストラはこの緊張と緩和の体験！一遍やって見ない。

『京都祇園入婿事件簿のロケ現場』

高級クラブのお客役と、マンションの管理人役の二役をした。エキストラの使い回しだ。ロケで移動するハコバンの中は、私と三田村邦彦と前田耕洋と新人女優の古柴香織さん。三田村さんが、次のロケは石川県らしい、古柴さんは富山県へロケに行くんでしよう、「近くのホテルを一緒に取ろうよ」古柴さんは笑って、冗談として聞き流した。「石川と富山は京都と神戸ほど遠いですよ」私は石川出身だから知っているんです。週刊誌のネタになるような内容の話ばかり、芸能人同士の噂話しにもちつきりだった。

『イマジカでCM撮影』

福島製粉「金ちゃんラーメン」のCM撮り。書類選考とオーディションが上手く行き通ることができ、いよいよテレビCMに出た。念願のCM出演が決まりとても嬉しかった。少し早めの七時過ぎイマジカ玄関前に着く。暫くすると一人現れ又一人、もう一人来た。

同じ事務所の若手三人が集まった。

三人とも知った顔だ。私だけがオジさんだ。私だけがオーデイションで選ばれたと思っていたのに、他にもいたのかとがっかりした。

「お早う御座います」「お早うさんです」
お決まりの挨拶を交わす。

建物の中に入ると、メイク室へ案内された。小さな部屋の中は、手荷物と男性のメイクさんを入れ五人で狭っ苦しい感じだ。

ヘアースタイルを整え顔をやってもらって、それがすんで衣装を着付けてもらった。

羽織袴に袴、これがまた大変で袴のぴんと張った肩のラインは細い竹で出来ている。

「ぶつけると折れるから気を付けて下さい」
エレベーターに乗るとき、ドアを開けて出るとき、廊下で人とすれ違うとき、体を横にして一日中蟹歩きをしなければならなかった。そしてもう一つ辛かったのは――。

ずっと正座をしたままの演技だった事だ。

毛布地で出来た。各辺が十センチ程の立方体

で、小さな座布団をお尻の下に入れたので、足のしびれは多少逃れたが、それでも、若手はカットが撮り終わる度に、立とうとすると、「いたたたたたあゝゝゝっ」

足がしびれて大変な様子だった。

「大丈夫ですか」笑ってスタッフは言う。

もつと残念なことは、CMの主役は美穂ちゃんという新人女優で、私と若手の三人は、美穂ちゃんの後ろで座って居る脇役だった事。

「ぽんぽんぽんぽん」 「ニッコリ」 「わっ」

カップヌードルの、底にあるバーコードを、見せてから叩いたり、そこに指を差したり、正座をさせられたまま、演技をやらされた。美穂ちゃんの、単独撮影に時間がかかった。額を叩く手つきが下手くそで、なかなかOKが出ない。美穂ちゃんの額が赤くなるのをメイクさんが直し、撮影は一時間にも及んだ。井上監督は楽しむかの様に指示をしていた。ダメ出しでも決して怒った顔はしなかった。私と川井君は、ノリノリで120%の演技。

下やんと西村君は顔がこわばっていたので、
「お笑い系の二人に負けるなよ」と監督が、
「ニヒルやろう」と私が突っ込み返す。
一人ずつのカット割りで、カップヌードル

を鼓つづみに見立て左手に持ち、右手で底をポン

と叩いた拍子に手からすり抜けて、カップヌードルがいきおい良く後ろに飛んで行った。首をすくめて笑う私に井上監督のツツコミ、

「おいしいね、今の使えるかも」

「世森さん、狙うとったんちやうの」

「川井くん、ちやうちやう、真剣やでえ」

その場の全員が和やかに笑ってくれた。無事CMの撮影は終わり八時ジャストUP。タレントとしての扱いを受けた日は格別だ。

通常では味わえない！満足感を味わえた。

こんな嬉しい思いをしている芸能人は、マゾっ気とナルシストと自負心、ある種、傲慢で自己堅持欲の強い人なのかも知れない……。もしかして、私もそうなのかも知れないな？

満足感一杯で帰路についた。

CMはたった十数秒だが、撮影には監督以下スタッフ全員の熱意が注ぎ込まれている。

その後、奈良県のゴルフ場のCMも出た。

書類選考で選ばれた三人だけのCM撮影で、その日は、エキストラじゃなくてタレント扱いで撮影が進み、気持ち良くて嬉しかった。

監督もスタッフ全員も優しく接してくれた。

支配人がいつでもゴルフをしに来て下さい、勿論ただでいいですよと言ってくれた。

このCMだけは録画したので残っている。

サプライズだとかサクセスストーリーとまでは行かなくて残念だが、二年とチョツとの体験記を読み返してみると、撮影現場で非日常的な、様々な人生体験が出来て、楽しみのある「明日をどう生きる」だったと思う。

明日はどんな明日が待っているのか……？

現在も私の知っている某タレント事務所のゴールドシニアのオジさん、オバさんたちが、撮影現場に行ったり、CMに出たりしている。

このように人達がいてこそ撮影現場は成り立っているのだ。「頑張れ」エキストラ」

「あとがき」

作者の体験が盛り込まれた手記で、単なる自伝的作品だと思われるであろうが、物語性を追求して書くと、明日を生きるのテーマが作為的になり、文学的な深さを求めると、体験した実録が薄まり陳腐になると案じた。テーマと文学、文学と物語の両立は難しい、テーマを論すように、説明する文言は控え、ストーリーの面白さを故意に求めず、テーマと、物語性のバランスを簡素に保ちながら、文章の読みやすさに徹して綴った。読んだ人のそれぞれの感性で、物語に仕立て上げて頂ければ光栄かつありがたい！。この作品が深いか浅いかはあなた次第！。

寺沢憲重